



「……どうして生きてるんだろう、私」

神宮寺カナコ

あなたといるから ver.1.75

第一章

序章……05P

第一話……07P

第二話……19P

第三話……31P

あとがき……41P

あなたといるから ver. 1.75

第一章

著者／流遠亜沙

ASSAULT-SYSTEM 文庫

I couldn't face my life without you.

それは多分、希望に続く物語。

序章

「……………死にたい——」

少女はそう呟いた。

艶やかな黒髪は腰まで届くほど長いストレート。肌の色はやや白く、瞳の色は黒い。整った顔立ちは可愛いというよりは綺麗だと評されるだろう。

神宮寺カナコ。

十六歳の高校一年生。

だが、その雰囲気は気怠く、世間一般に持たれる女子高生のイメージからは程遠い。

眠たそうに目を半眼にし、学校の屋上で手すりにもたれかかっている。

風景を眺めているわけではない。

彼女の目は遠くを——ここではないどこかを見ているようだった。

「また始まった。カナコの『死にたい』が」

そう言ったのはカナコの隣にいる少女だ。

黒い髪は肩にかかるくらいのショートカットで、毛先はゆるくウェーブがかかっている。

小柄でどこか小動物を思わせる、人懐っこい雰囲気がある。カナコと同じデザインの黒い

セーラー服をラフに着崩しているが、だらしない感じはしない。

及川ミズキ。

カナコの同級生にして、唯一、彼女の友人と呼べる存在である。

「そんなに死にたいなら、死ねばいいじゃない？ それとも、あたしの気を引きたくて言ってるのかな？」

明るい口調で言うミズキ。

「……………」

対するカナコは無言で遠くを見ているだけだ。

ミズキは嘆息して、友人の横顔を眺める。

カナコは美人だ。同性のミズキが憧れるくらいに整った顔立ちをしている。これで愛想が良ければ間違いないくもてる——が、彼女はクラスで浮いていた。ミズキ以外とまともに会話をしている場面など見た事がない。

そんなカナコだから、当然のようにクラスメイトとは馴染んでいない。そもそも学校に來ない事も多い。

學校に來ても、たいていの時間は屋上で黄昏たそがれている。

日がな一日、遠くを眺めては溜息ためいきを漏らしている。

その姿が美しかった。思わず息を飲んでしまうほどに綺麗だった。

だからミズキはカナコに興味を持った。最初はただの好奇心だったのだが、気がつけば彼女と一緒にいるようになった。

無論、ミズキは授業には出ているので、カナコと過ごすのは昼休みや放課後だけだ。

会話らしい会話はない。ただミズキはカナコの隣に並ぶだけ。

無言で。

無音で。

ただ時間だけが流れていく。

しかし、不毛とも呼べる一時ひとときが、ミズキにはかけがえのない時間だった。

何も出来ない、何もしてやれない自分が唯一出来るのは、カナコの隣にいる事だから。

そんな、ささやかな時間に必ず一度はカナコが呟く。

『死にたい』——と。

カナコと出逢ってから、もう何度も耳にしたフレーズだ。

だから今更、驚かないし、そんな事は言うもんじゃないと責めるつもりもない。

カナコにしてみれば、溜息と同じもの。つい口から出てしまっているだけだとミズキは知っている。

だから何も言わない。

「ねえ、ミズキ」

「なに、カナコ」

「私の事——好き？」

「うーん……好きじゃないよ」

「そう」

「大好きだよ」

「……………馬鹿じゃないの？」

「カナコが訊いてきたのに、ひどいにゃー」

これは二人の少女のお話。

死にたがりの少女と、少しだけ変わった少女の、出逢いと始まりの物語。

第一話『ガール・ミーツ・ガール』

極東の島国——日本。

そこには独特の文化がある。

それは巨大な『ロボット』や『怪獣』というものをモチーフにした娯楽作品が多い事だ。

この国ではわざわざ『巨大な』という形容詞を用いるまでもなく、ロボットと言えば人型をした巨大兵器を。怪獣と言えば、やはり巨大生物を誰もが想像する。

無論、巨人や異形の怪物が登場する神話や物語は古くから世界中に存在するが、それらに独自の解釈やアレンジを加えて製作されるアニメーションや特撮作品は世界一——むしろ、日本の独壇場とも言えた。

それは西暦二一四四年の現在においても変わらない。

たとえ現実に巨大な異形が現れ、それを打倒するための人型兵器が実戦配備されている現在でも、そういったものに対する憧憬はなくならない。

人は強く巨大なものに、怖れと共に憧れを抱く。

どれだけの時が流れても、人間の本性は変わらない。

彼女の様に——

「……………」

自宅のリビングで、少女はテレビ画面を食い入る様に見つめていた。

肩にかかるくらいのも、ややウェーブがかかった黒いショートヘア。ぱつちりとした大きな黒い瞳。体格は同年代の少女と比べても小柄で、どこかハムスターの様な小動物を思わせる可愛らしさがある少女だ。

おいかわ
及川ミズキ。

先日、高校生になったばかりの十五歳。

ロボットアニメが趣味という点を除けば、極めて一般的な女子高生である。

「……………」

ミズキが無言で観ているのは国営の朝のニュース番組だ。そこには白を基調にした『ロボット』が、黒い『怪獣』と戦っている映像が映されている。

アニメや特撮ではない。実際に記録された映像だ。

テロップの日付と時間は四月八日の夜——昨夜に当たる。

「——ミズキ、早く食べないと学校に遅れるわよ」

「……うん、判ってる」

祖母そぼに急せかされても、ミズキはテレビ画面から目を離あやさない。すでに諦あきらめているのか、祖母はそれ以上は言葉にしない。

映像は白いロボットが黒い怪獣にとどめを刺すシーンに変わっていた。ロボットが日本刀のような片刃の剣を振り下ろし、怪獣の頭頂部から下腹部までを一刀両断にしていた。

これだけ聞くとお茶の間の放送に流せないグロテスクな情景が頭に浮かぶが、怪獣の断面からは肉や骨、内蔵器官などは見えず、体液が飛び散る事も無い。数秒もするとその身体からだは砂の様な光の粒子になって分解されて、跡形もなく消え去った。

そこで映像は白いロボットの勝利を称たたえるように上半身をアップで映した後、ニュース・スタジオに切り替わった。

「あれ？ 〈スサノオ〉の左腕の装甲がへこんでたけど、編集でカットされたのかな？」

〈スサノオ〉。

それが白いロボットの名前である。

正式名称は対タタリガミ戦用機神きしん〈スサノオ〉。

そして『タタリガミ』とは〈スサノオ〉が倒した怪獣の総称である。

——巨大ロボットと怪獣。

それは現代において架空フイクションの存在ではなくなっていた。

「ミズキ、いい加減にしないとバスの時間に合わないわよ」

「あ、はい」

しかし、人々の日常が一変するほどの大事でもなくなっていた。

現に『昨夜、ロボットと怪獣が戦った』という事実じじつに誰も驚かない。ちょっとした事件が起きたくらいの認識だ。

テレビではニュースキャスターとコメンテーターが〈スサノオ〉の武器の話をしている。

「あの剣、〈アメノムラクモノツルギ〉っていうんだ……」

トーストをかじりながらも、ミズキはやはりテレビから目が離せない。ここ高千穂に移り住んでから、初のタタリガミの出現。それを撃退するため〈スサノオ〉が昨夜、戦闘を行った。

しかも新たな武装たすまを携たずえて。

彼女はその事実じじつに興奮きんぷんを抑えきれない。

「……カッコイイなあ——」

ミズキはトーストをかじるのも忘れて〈スサノオ〉に想いを馳せる。まるで恋する乙女のように——いや、実際に彼女のそれは恋に近い感情だった。

〈スサノオ〉が実戦配備されてから約二年間、ミズキはずっとその姿に憧れていた。白を基調としたカラーリングとヒロイックなデザインに心を奪われた。

真正正銘の人型。

顔は小さく、バイザーの奥にはデュアル・アイ二つの目。

まさにミズキの愛するロボットアニメから抜け出てきたようだと感じた。

「どんな人が乗ってるんだろう」

〈スサノオ〉の搭乗者は公表されていない。判っているのは有人機であるという事だけだ。

「……………」

そうしてまた〈スサノオ〉の事を考える。

時間は家を出る予定時刻を過ぎていた。

† † †

西暦二二一四年四月九日。

まだ桜が満開の時期。

日本の九州地方。宮崎県北端部にその学校はあった。

県立高千穂高等学校。

生徒数は約四百人ほどの、どちらかと言えば小さな学校である。

「はあ……」

教室に続く階段をゆっくりと上りながら、少女は憂鬱ゆううつな気分と戦っていた。

腰まで届くストレートの長い黒髪と、黒曜石オプシディアンのような黒い瞳。黒いセーラー服を着た

姿は極一般的な日本の女子高生のそれだ。

しかし、その少女は美しかった。

整った顔立ちと、すらっとした体型。何かが突出しているわけではないが、均整のとれた容姿には隙すきがない。それは『少女』という成長途上の一定期間にしか許されない、無垢な美しさと言える。

だが、少女の雰囲気は気怠けだるい。不機嫌そうですらある。

何がこの美しい少女の機嫌を損ねさせているのか。

理由はいくらでもあるが、ひとつ挙げるとすれば——現状だ。

少女は今、自分の在籍するクラスの教室に向かっている。

これから教室に入り、まだ一度も座った事のない自分の席に座り、延々と息苦しい気分と戦わねばならない事を思うと死にたい気持ちになる。

「……………」

だから目的の階に着き、廊下につながる角を曲がった所で、少女の足は止まった。

やはり教室に行く気にはなれない。すでに授業が始まっている教室に入っても悪目立ちするだけだ。

(…：屋上に行く)

そう考えて少女は踵きびすを返す。

すると、しんと静まり返っていた廊下に慌ただしい足音が聴こえた。誰かが階段を駆け上がってくる。その足音がだんだんと大きくなってくる。

そして――

「――あ!？」

「――え?」

授業中の廊下に人がいるとは思わなかったのだろう。階段を駆け上がってきた誰かは、その勢いのまま曲がり角を九十度ターンし、出会頭がしらに少女とぶつかった。

＋　＋　＋

(――綺麗な子だ)

及川おいかわミズキはそう思った。

祖母の言葉に空返事をし、(スサノオ)に関する放送を最後まで観てしまったミズキは、当然の如くバスに乗り損ねた。東京で暮らしていた彼女にしてみれば、次の便に乗れば良いという気持ちだったのだが、ここは田舎いなかだ。バスの便数は限りなく少ない。

テレビに――いや、(スサノオ)に夢中だったミズキはそれを失念していた。結果、学校に到着した頃には一時間目の授業が始まってしまっていた。

バス停から校門まで走り、下駄箱で靴を履き替え、教室に向かってまた走った。遅刻の理由をあれこれ考えていたのが悪かったのだろう。完全に注意力が散漫になっていた。こんな時間に廊下を歩いている者などいない――自分の事は当然棚に上げて――と思いきんでいたミズキは、教室に繋がる曲がり角で信じられないものを見た。

――学校の廊下に女神がいた。

言葉にしてしまえば、ありふれた陳腐ちんぷな表現だが、その時には他の表現が浮かばなかつ

た。

だから次の瞬間、「——あ!？」などという言葉しか出てこなかったのも、ある意味で自分らしいとも思った。ボキャブラリー 語彙が貧困なのだ。

しかし、それも無理からぬ事だと思う。

『女神』はあまりにも美しかったのだから。

ぶつかる直前の「——え？」という短い言葉にすら、鈴を転がしたような澄んだ美しさがあった。

その直後の柔らかい感触を忘れる事はないだろう。

全速力でぶつかったミズキは勢いを止められず、『女神』を押し倒していた。

そして気付いた。自分がぶつかったのが、とんでもない美少女である事に。

さらさらの長い黒髪。オフンディアン 黒曜石のような黒い瞳。抱きしめたら折れてしまいそうな細い肢した体。

ぶつかった時にも感じたが、この少女には重さがないのではないか。きつと、見た目以上に華奢きゃしゃな身体からだつきをしているに違いない。

押し倒された体勢でミズキをじつと見ている少女の姿は儂はかなげで、どこか嗜虐しごやく心をそそられる。

美しい少女を押し倒している——その状況がミズキの思考を変な方向に加速させる。自分が同性である事すら忘れさせる、その少女の美しさは魔性だ。ミズキの癖っ毛のショートヘアとは対照的な長い黒髪が、乱れて顔にかかっている姿は艶あでやかで美しい。

しかも——

(うわ、スカートがめくれている。しかも……黒!?)

少女の下着の色まで確認したところで、ミズキはまず先にすべき事に気付いた。

「……ごめんなさい! ……大丈夫?」

押し倒してしまった少女に手を差し出す——が、その手は少女によって払いのけられた。少女は自力で立ち上がり、スカートに付いたほこりを払うと、無言で階段を上っていた。

まるで何事もなかったかのように。

ミズキと一度も言葉を交わす事もなく。

しかしミズキは見てしまった——少女の、吸い込まれそうになる、どことなく寂しそうな黒い瞳を。

「……………」

そして床に落ちている物に気付いた。ミズキも持っている生徒手帳だ。

「あの子のかな？」

恐らく、先ほどぶつかった時に落としてしまったのだろう。生徒手帳を拾い、裏返す。そこには顔写真が印刷された学生証が収められている。写真は間違いなくあの少女だ。

「『1年A組 神宮寺カナコ』……同じクラスだ」

ミズキがこの高校に入学して一週間。まだクラスメイト全員の名前は覚えていないが、あれだけの美少女が同じクラスにいれば忘れるはずもない。

だが、カナコの顔に見覚えはない。初めて会ったはずだ。

「……………よし」

ミズキは拾った生徒手帳を持って、少女を追いかけた。すでに遅刻は確定している。そんな事より彼女を追いかけるべきだ。

階段を駆け上がると扉があり、その先は屋上だった。

† † †

神宮寺カナコは今年の春から高千穂高校に入学した一年生だ。

だが、彼女は授業はおろか、入学式にも参加していない。そもそも、高校に通うつもりもなかった。にもかかわらず、こうして制服を着て、形だけとはいえ学校にいる。

「はあ……………」

カナコは溜息を吐き、呟いた。

「……………死にたい——」

天気は快晴。校庭を見下ろせば、まだ満開の桜が綺麗に見える。

なのに、カナコの気分は憂鬱ゆううつだった。

今に始まった事ではない。物心がつく頃から彼女の気分はそうだった。

生きる事に意味を見出せなくなった。

生きる事を面倒に思うようになった。

生きる事が嫌になった。

理由は判らない。なぜか、そうなってしまった。

それからは他人が怖くなった。

世界そのものに疎まれてうといる気がした。

どこにも自分の居場所はないと思っていた。

それでも今日まで生きてきた——生きてこられたのには理由があった。
それが……。

「〈スサノオ〉——」

呟く。

愛おしい人の名を呼ぶように。

そこへ——

「——あなたも好きなの？ えっと……神宮寺カナコ、さん？」

カナコとは別の少女の声でした。

振り返るとそこには、先ほど廊下でぶつかった少女がいた。肩にかかるくらいの、少しウェーブがかかった黒髪。大きめの黒い瞳はこちらを窺うように落ち着きがない。それなりに可愛らしい容姿だが、特に印象に残るほどでもない。

「……どうして、私の名前を知ってるの？」

警戒するようにカナコは訊いた。

「これ、さっき落としたでしょう？」

ショートヘアの少女が差し出したのはカナコの生徒手帳だった。

「ごめんね、勝手に見て。あたし、同じクラスの及川ミズキ。ミズキでいいよ」

及川ミズキというらしい少女は、少し興奮気味にそう言った。その様子はどこかハムスターの様な小動物を思わせる。

一瞬、礼を言うべきか悩んだが、そもその原因はぶつかったミズキだ。だからカナコは無言で生徒手帳を受け取った。

「ねえ、あなたも好きなの？」

ミズキはそんなカナコの態度に気を悪くした素振りも見せず、再度そう問うてきた。

「……何の事？」

「——〈スサノオ〉！ さっき名前を呼んでたよね!？」

独り言を聞かれた事よりも、ミズキの異様なテンションに気圧された。無視すればいいものを、カナコは質問に質問で答えてしまった。

「……『も』って何？ あなた、ああいうのが好きなの？」

「——うん！ 大好き！」

正直、少し引いた。

この少女は白昼堂々、何を告白しているのだろう。

いや、別に自分が告白されたわけではないのだが、妙に気恥かしい気持ちにカナコはなった。そのくらいミズキの表情は真剣だった。

「カッコイイよね、〈スサノオ〉！ あんなリアル系のスマートなデザインなのに、スーパー系が使いそうな武器とか魔法で戦うとかあり得ない！ これで空が飛べたらまさにスーパーロボットだよね！」 けど陸戦兵器つてところが燃えるのかも！ 昨日は日本刀みたいな武器……〈アメモムラクモノツルギ〉だったけ？ あれを使ってたけど、ロケット・パンチとかないのかな？ あとドリルは基本だよね！」

とらうとう
滔々し熱弁するミズキ。

（リアル系？ スーパー系？ ロケット・パンチ？）

ミズキが何を言っているのか判らない。確かに〈スサノオ〉は陸戦兵器だが、それ以外は何を言っているのか理解が追いつかない。ドリルというのは削岩機のことだろうか？

カナコは珍獣を見るような目をミズキに向けた。

「あなたが何を言っているのか判らないわ」

「——へ!? あれ、もしかして好きじゃなかった……?」

「……………」

「じゃあ、どうして? さっき〈スサノオ〉って言ってたよね……?」

ミズキの問いに、やはりカナコは無言を返した。

好きか嫌いかなど考えた事がなかった。

ただ、カナコにとって〈スサノオ〉が特別な存在である事に違いはない。

なぜなら、彼女は——

「私は——」

カナコが何かを言おうとした時、ふいに警報が鳴った。

それは本来ならあり得ない事だったから、ミズキは警報の意味に気付くのが遅れた——

否、彼女だけではない。ほとんどの人間がそうだっただろう。

「……………タタリガミ警報」

カナコの眩きに、ミズキは自分の耳を疑った。

† † †

突然のタタリガミの出現の予兆。しかし事態に反して、タタリガミ迎撃基地〈タカマガハラ〉の発令所は落ち着き払っていた。

慌てたところで仕方がない。

何よりも、彼等はこの事態を予測していたのだから。

「——どっつ。」

自衛隊の士官用制服に似た衣装に身を包んだ若い女性が訊ねた。

鳴海カヤ。

年齢は二十七歳。

長い茶色の髪をアップにしており、引き締まった表情からは『出来る女』に見えなくもない。

〈タカマガハラ〉における戦闘指揮官である。

「うーん……」

カヤが問うた先にいたのは、紅白の巫女装束を着た娘だった。

「アラミタマ反応、感知。予測出現位置は……高千穂高校方面だねえ」
閉じていた目を開き、のんびりとした口調で巫女装束の娘は言った。

飯綱メイ。

見た目は二十代前半くらいに見える。

長い髪は白く、瞳の色は赤い。見る者によつては兎を連想するかもしれない。

可憐な容姿に特徴的な色の髪と瞳——同じ器量良しでも、カヤとはまったく方向性が違っている。カヤが『近所に住んでいる綺麗なお姉さん』だとすれば、メイは『物語の中のお姫様』だろう。

「目と鼻の先か——」

カヤが口を開く。

「カナコは学校に行つてるわね？」

「現在位置は追跡しています。学校の屋上にいます」

カヤの問いかけに、彼女やメイのいる場所からは一段下になるオペレーター席の一人が答えた。

「……そう、教室じゃないのね——」

あらかじめ予想していたようにカヤは呟いた。

「〈スサノオ〉の修復状況は？」

「昨夜の戦闘で破損した左腕の修復が間に合いませんが、出撃は可能との事です。ただし、

〈アメモムラクモノツルギ〉は禊中で使えません」

「装備は〈トツカノツルギ〉に変更。〈スサノオ〉、出撃準備」

カヤの指示に、彼女の部下であるオペレーター達が、それぞれに「了解！」と応え、自らの仕事をする。

ちなみに、『発令所』と言っても大規模なモニターやコンソールがいくつも並んでいるわけではない。部屋の広さはせいぜい学校の教室くらいで、設備も民間のテレビ局と同程

度だ。

「住民のシェルターへの避難状況は？」

「警報は出していますが、一部で混乱が発生しています」

別のオペレーターがカヤの問いに答えた。

無理もない。昨夜に続いてのタタリガミの連続出現——これは前例がない。タタリガミが観測される様になって二年経つが、一週間と経たずに新たなタタリガミが出現する事はこれまではなかった。だから、タタリガミの発生には最低二週間の間隔がある——一般人はそう思いこんでいた。

「避難誘導を急いで。戦闘に巻き込まれるわ」

タタリガミの出現位置はある程度決まっている。高千穂神社を中心に半径約五キロメートル以内だ。その範囲内数カ所に地下シェルターが設置しており、そのひとつが高千穂高校の地下にある。付近の住民は速やかに避難出来るはずだ。

「〈スサノオ〉の出撃準備、完了しました」

「判ったわ」

部下の声に答え、カヤは懐から携帯電話を取り出し、目的の人物の番号を呼び出した。

「カナコ、警報は聞こえてるわね。〈スサノオ〉はいつでも出せるから、迎撃、お願いね」
通話を終え、携帯電話を仕舞う。

そうしている間に正面の大型モニターに、格納庫の〈スサノオ〉の姿が映る。

白を基調にした兵器としては派手めのカラーリング。人体を模したスマートでヒロイックなデザイン。おまけに顔もある。

（まるでアニメだわ）

カヤは時折、そんな風に考える。

「——タタリガミ、顕現するよ」

メイが、どこか緊張感に欠けた口調で言った。

† † †

タタリガミは高千穂高校の校庭グラウンドに顕現した。

「……あれが、タタリガミ？」

恐らく、肉眼でタタリガミを見たのは初めてなのだろう。ミズキは屋上の鉄柵てっさくに身を乗り出すようにして、眼前に顕現した異形を見つめている。

そう——異形だ。

腕がある。脚がある。しかし、その数が異常に多い。口がある。目もある。だが配置がおかしい。こんな姿をした生物など自然界には存在しない。まともな感性のある人間であれば、目を背けたくなる醜悪な姿をしている。

「——早く避難した方がいいわ」

ミズキと同じようにタタリガミを見つめているカナコが、視線はそのままミズキに言った。その顔には表情がなく、恐怖を感じている様子は微塵も感じられない。

「神宮寺さんは逃げないの？」

「私はやる事があるから」

だから早く逃げろ——カナコの目は言外にそう語っている。

しかしミズキは避難しようとしなない。

「……さっきの電話、誰から？」

「……………」

対するカナコは無言。

「聞こえたよ、〈スサノオ〉がどうとか。もしかして、あなた——」

ミズキが言葉を続けようとした時。

——しゃらん。

鈴を鳴らしたような音が聴こえた。

カナコが制服の袖を捲り、細い右腕を露にする。右手首に巻かれていたのは赤い紐で繋がれた、いくつもの天然石と鈴だった。

カナコが軽く腕を振ると、また鈴の音が鳴った。

「——来て、〈スサノオ〉」

カナコの言葉に、ミズキは耳を疑った。

今、彼女は何と言った？

それを確認する前にその現象は起こった。

まず景色の色が反転した。そして、光り輝く円状の幾何学模様——魔法陣の様なものが屋上に描き出される。

そこから、水面に浮かび上がるように現れたのは白い巨人。

対タタリガミ戦用機神。

その名をミズキは知っている。

「……………〈スサノオ〉？」

そう、それは〈スサノオ〉だった。今朝 ニュースで観たばかりだ。

そうでなくてもミズキが見紛^{みまじ}うはずもない。

彼女が憧れ、恋焦がれたその姿を。

それをカナコが呼んだ。

ミズキがカナコに視線を向ける。

「……………」

カナコは無言でこちらを見ていた。

「あ……………」

言葉が出ない。

まるで金縛りにあっているように身体が動かない。

カナコの瞳から目が離せない。

ミズキを見る無感情で透明な瞳が、やはり、どこか悲しい色をしていたから。

第二話『南国の守護者』ガーディアン

魔法陣を介して現れた白い巨人——及川ミズキがそれを見間違っはすがない。

彼女が憧れ、恋焦がれた、存在。

タタリガミを倒すために戦う戦神。

日本が誇るスーパーロボット。

その名は〈スサノオ〉。

いにしえ古の神話の神の名を与えられたもの。

南国の守護者。ガーディアン

「……神宮寺さん、あなたが——」

言葉が続かないミズキに嘆息したような表情をちらりと見せ、神宮寺カナコは〈スサノオ〉の腹コックピットの中に消えた。

＋　＋　＋

〈スサノオ〉の操縦席。

そこに座るとカナコの気分はいくらか安らぐ。

ここが自分の居場所なのだ、少し安心する。

「……………はあ——」

どこか恍惚とした表情で吐息を漏らす。

ここは外の世界から隔絶された、自分だけの世界だ。

在るのはカナコと〈スサノオ〉だけ。

他に誰もいない。

誰も彼女を傷付けない。

ゆりかごの中のような、優しい世界。

ずっと、ここにいたい。

このまま、永遠にこうしていられたらどんなにいいか。

しかし、そうもいかない。

——『敵』がいるから。

カナコの表情が暗く歪む。

コクピット内の正面モニターに映る異形の存在——忌むべき相手を見つけたから。
タタリガミだ。

「〈スサノオ〉——起きてる？」

カナコが囁くように言った。

『〈スサノオ〉、起動完了しています。おはようございます、カナコ』

低い男声だんせいを思わせる機械音声マシン・ヴォイスがカナコの耳に届く。無論、〈スサノオ〉の声ではない。

〈スサノオ〉に搭載されている操縦補助用のナビゲーション・システム〈ヤサカニノマガタマ〉のものだ。長いのでカナコは〈ヤサカ〉と略称で呼ぶ。

「機体の状況は？」

『左腕の修復が完了していません。補正プログラムを走らせてありますので、姿勢制御装置オート・ペランサーが働いています。操縦に問題はありますが、左腕はないものとお考えください』

「魔剣は〈トツカノツルギ〉ね」

『〈アメノムラクモノツルギ〉は襖中みそぎです』

「判った——戦闘準備」

『了解。カナコ。戦闘モードに移行。各システム・機体、共に問題無し。御武運を』

「了解。行くよ——〈スサノオ〉」

〈スサノオ〉の顔のバイザーの奥で、メイン・カメラである二つの目が緑色に輝いた。

† † †

「『時差ボケ』——ですか？」

ミズキの頭に疑問符が浮かぶ。

垂直離着陸機の乗客室。

カナコが〈スサノオ〉の搭乗者であると知ってしまった事で、ミズキはそこに収容されていた。身柄を拘束されたと言ってもいい。

人員の輸送が本来の目的でないため、乗客室は狭い。席は二列で向かい合うように設けられており、六人分しかない。

「そ——時差ボケ」

ミズキの言葉に答えたのは、どこか飄々とした雰囲気のある男性だった。

紀藤ヤヒロ。

年齢は二十八歳。

男性にしては長めの黒髪と、ラフな格好のためか、どこか『大人』という表現が似つかわしくない。少なくとも、真つ当な会社勤めをしているイメージは湧かない。

大学生かフリーターか。いまひとつ地に足が着いていない。そんな男性だ。

ちなみに、ミズキの自己紹介は済んでいる。

初対面にも関わらず『じゃあ、ミズキちゃんね』と砕けた口調で言われたが、特にヤヒロの態度が馴れ馴れしいとか気安いとは感じなかった。昔から知っている近所のお兄さん——そんな感じだ。

「タタリガミ、動かないだろう？ 個体差はあるが、こちら側に顕現けんげんしてから約三十分はああしてじっとしてる。この世界に順応するために必要な時間とか、色々説はあるけど、〈タカマガハラ〉では時差ボケと呼んでる」

「〈タカマガハラ〉って〈スサノオ〉を所有している組織ですよね？」

解説をするヤヒロにミズキが訊ねた。

「一応は日本政府直轄の特務機関という事になってる。対タタリガミ戦用のね」

そこまではミズキに限らず一般にも知られている情報だ。

「どうして〈スサノオ〉は攻撃しないんですか？ タタリガミが時差ボケで動けないいうちに攻撃すればいいじゃないですか」

「よく見てごらん。タタリガミの周りに霧きりみたいなものがあるだろ？」

確かにタタリガミの周囲は、もやがかかったようにぼんやりとして見える。

「あれがあるうちはタタリガミは一切の攻撃を受け付けない。活動を開始すると消えるんだけどね。逆に言えば、霧が出ている間はタタリガミは活動出来ない。そのおかげで住民が避難する時間が稼げる」

それは一般には知られていない情報だ。もしかしたらこれは冥土の土産で、このまま口封じされるのではないかとミズキは不安になる。

「……………」

「あ、大丈夫。たいした情報じゃないからね。知られたからって、ミズキちゃんをどうこうしたりはしないよ」

ミズキは内心でほっと胸をなでおろす。

「……君はカナコちゃんの友達？」

「え？」

「いや、屋上に一緒にいたからさ。友達が出来たのかなって。違った？」

「……もしかして神宮寺さん、監視されてるんですか？」

嫌な予感がミズキの頭をかすめる。

「〈スサノオ〉を動かせるのは彼女だけだからね。ボディガード 身辺警護のために、カナコちゃんの状況は常に把握されてる」

ヤヒロの言葉は肯定だった。

「……………」

身辺警護と言えば聞こえはいいが、それは監視されているのと同じだ。良い気分はしない。

ふいにヤヒロが真面目な顔になる。

「——もし迷惑でないなら、カナコちゃんの友達になってくれると嬉しい。彼女は……孤独なんだ」

「孤独……」

「生き苦しさのようなものを感じながら生きている。態度には出さないが、辛くないはずがない」

ミズキは思いだす。カナコの寂しそうな瞳を。

態度に出していない？

違う、誰も気付いていないだけだ。もしくは気付いていない振りをしているだけ。カナコが抱えている気持ちを誰も理解出来ないから。

「……………」

そう思うと、ミズキは怖くなった。

誰にも理解されない恐怖。

人の中にいながら孤立する寂しさ。

それがどれだけ不安で恐ろしいものか——ミズキはそれを知っているから。

† † †

顕現したタタリガミの形状は異形だった。

人間の胴体に脚が六本、腕は七本備わっている。首から上は無い。だが、裸の胴体に、いくつもの口と目が出鱈目でたらめに配置されている。

「〈ヒルコ〉タイプか……何度見ても慣れないわね」

〈タカマガハラ〉発令所の巨大な正面モニターに映し出されたタタリガミの姿に、カヤはそう感想を漏らした。

〈ヒルコ〉——蛭子神あるいは蛭子命は、日本神話に登場するイザナギとイザナミの間に生まれた最初の神の名だ。不具の子として生まれ、すぐにオノゴロ島から流されてしまった不遇の神。

〈ヒルコ〉とはそれにちなんだ名称だ。

「霧が晴れます。〈ヒルコ〉、活動を開始」

オペレーターの女性が報告する。

「目標の神格値は？」と問うカヤに、「神格値は二千。下級クラスだねえ」とメイが応える。

神格値はタタリガミの大まかな階級分けを行うための数値だ。三千以下が低級、六千以上を上級、その中間を中級と〈タカマガハラ〉では定めている。

モニターでは〈ヒルコ〉がのっそりとした動作で動き出そうとしていた。

〈ヒルコ〉の進行方向に立ちふさがるのは〈スサノオ〉だ。

「カナコ、たいした相手じゃないわ。一気に決めましょう。左腕が使えないんだから、接近戦はなしよ」

カヤが〈スサノオ〉のkokopittoにいるカナコにインカムで指示を出す。

『——了解』

短い応答が発令所のスピーカーを通して届く。

冷静な声音だ。これから異形の怪物と戦う少女の物とは思えないほどに。

† † †

白を基調とした巨大な人型——対タタリガミ戦用機神〈スサノオ〉。

それが持つのは魔剣〈トツカノツルギ〉。

名前の通り剣の形状をしているが、それは実際には『杖』に近い。

魔法使いが魔法を使うための杖。

そう——魔法の杖だ。

タタリガミには通常の物理攻撃が通用しない。タタリガミは攻撃を察知すると、その身を守るように特殊な『場』を展開する。

この世界とは相の異なる世界——『ヨモツヒラサカ』に繋がっているとされている『場』。

それに取り込まれた物質がどうなるのかは判っていない。ただこの世界から消滅するのは間違いない。

故に、タタリガミを殲滅するにはこの『場』を、あるいは『場』ごとタタリガミを破

壊す必要がある。

それを可能とするのが『じゅほう呪法』だ。

タタリガミを打倒し得る唯一の手段。魔術・呪術・妖術と様々な呼称があるが〈タカマガハラ〉では呪法で統一されている。

そして、それを物理的な威力として効率的に顕在化させる装置が『デバイス魔剣』である。使用者の精神エネルギー——いわゆる『マジック魔力』を撃鉄とし、自然界に存在する『マナマナ』を増幅し、呪法に変換する装置。

それが〈トツカノツルギ〉だ。

カナコは並はずれた魔力の持ち主であり、それが〈スサノオ〉の搭乗者として選ばれた理由の一端を担っていた。

「ハラエタマエ・キヨメタマエ・モリタマエ・サキワエタマエ——」

りやくはいし略拝詞——呪法を使うための簡略化された祝詞を唱える。言わば銃の安全装置を外す行為に近い。

そして——

「〈ザンパー両断するもの〉——」

ことだま言霊——これによって発動する呪法の種類を選択する。

最後に——

「——アクティベイトその威を示せ」

呪法という名の弾丸を撃ち出すための言葉トリガーを告げる。

同時に〈スサノオ〉が〈トツカノツルギ〉を薙ぎ払う様に振るう。剣閃をなぞる様に紅い閃光があらわ顕れ、〈ヒルコ〉に飛ぶ。

真一文字の紅い一線が、その名ザンパーの通り〈ヒルコ〉の胴体を上下に両断した。

——おおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお……。

断末魔と呼ぶにはあまりにささやかな、しかし地獄の底から響いてくるようなおどろおどろしい声を残しながら、〈ヒルコ〉と呼ばれたタタリガミはその身を塵状ちりに変えながら消えていく。

その様子を眺めながらカナコはいつも思う。

（あなたは生まれる世界を間違えた。多分、私と同じように——）

タタリガミの死体は残らない。あるのは慟哭どうこくの残響だけだ。

「……………」

勝利の喜びも、達成感も、満足感もない。もはや彼女にとってタタリガミとの戦闘は繰り返される日常の一部でしかない。

勝って当然。

負けた時は——その時はどうなるのだろうか？

それで何もかも終わるのだろうか？

だったら、いつその事……。

『——カナコ、おつかれさま。戦闘終了よ』

カヤからの通信がカナコの暗い思考を中断させた。

『それから、基地に帰還したら第一ブリーフィング・ルームに来てちょうだい』

「……了解」

端的に答えて通信を終えると操縦席に静寂が訪れる。

——静かだ。

「……どうして生きてるんだろう、私」

ぽつりと呟く。

それに答える者はいない。

〈ヤサカ〉は音声として認識しているが、それは自分に対する質問ではないと理解している。だから答えない。

「……………死にたい」

カナコの声に答える者は、やはりいない。

† † †

タタリガミと〈スサノオ〉の戦闘が長時間に及ぶ事はほぼない。下級クラスとの戦闘であれば、ほんの数分で終了するのが常だ。今回のように一方的に勝利する事も珍しくない。人的被害も出ず、施設や住宅への被害も最小限。故に局地災害指定生物とされていながら、タタリガミの脅威度は低い。

それは〈スサノオ〉の強さの証明であるし、〈タカマガハラ〉にとっては栄誉だ。少なくともカヤはそう認識している。

だが戦場に直接身を置くカナコにとってはどうでもいい事だった。現に、戦闘を勝利で終えたにも関わらず、ブリーフィング・ルームに現れた彼女の態度には誇るような素振りすら見られない。相変わらずの無表情だ。

(相変わらずね。少しは自信を持ってくれるといいんだけど……)

カヤは心中で嘆息する。

カナコと出会って二年になるが、未だに彼女は心を開いてくれない。それは相手がカヤに限った事ではないが。

「——カヤさん」

ぼつりと呟くようにカナコが口を開いた。

「ん、何？」

「用件は何ですか？ わざわざ呼びつけておいて、溜息をつかれても困ります」

「あ……ごめんなさい」

どうやら態度に出していたらしい。こういうところが我ながら情けないとカヤは反省する。

「ちよつと待ってね、もうすぐ来ると思うから」

「？ 誰を待っているんですか？」

「まあまあ、すぐ判るから」

カナコが不審な表情を浮かべていると、ブリーフィング・ルームの扉が開いた。入室して来たのは男女の二人連れだ。

男の方はカナコも知っている。伸ばし気味の黒髪とラフな服装の、どこか飄々とした印象がある——紀藤ヤヒロだ。

「や——カナコちゃん。今回も鮮やかな手並みだったよ」

「こやかに言うヤヒロ。」

「ありがとうございます、ヤヒロさん」

それに対しカナコは、彼女にしては珍しく、少しはに cand 表情で答えた。

そして、もうひとりの人物に視線を向けると——

「……どうして、ここにいるの？」

と、また不審な表情を浮かべた。

ヤヒロと共に入室してきたのは、カナコが学校でぶつかった少女だった。

ややウェーブがかかった黒いショートヘア。ぱつちりとした黒い瞳。ハムスターのような小動物を思わせる雰囲気。小柄な体躯。

及川ミズキだ。

「すごかったよ、神宮寺さん！ タタリガミを一撃で倒しちゃうなんて！」

「……………」

「まさか（スサノオ）のパイロットが同い年の女の子だったなんて、あたし、なんだか嬉しくて！ ねえ、さつきの技なんて言うの!? 雷光一閃らいこういつせんって感じたんだけど!？」

興奮気味にまくしたてるミズキにカナコはやや気圧けおされた。屋上の時もそうだった。こ

の少女はやはり『ああいうの』が好きなのだろう。

「……〈両断するもの〉の事？ あれは私の精神力を物理的なエネルギーに転換する形相干渉システム——要は魔法よ」

正しくは呪法じゆほうなのだが、細かい説明が面倒になったカナコは魔法という言葉を使った。

「魔法!? 本当に魔法なの!?! じゃあ神宮寺さんは魔法使いなの!?!」

一気にテンションが振り切れたミズキは目を輝かせてカナコに迫った。

「……カヤさん、どうして部外者がここに居るんですか?」

ミズキの勢いに耐えかね、カナコはカヤに助けを求めた。

だが、カヤはそんなカナコの姿がツボにはいったらしく、笑いをこらえている。

「もう部外者じゃないよ」

カヤの代わりに応えたのはヤヒロだった。

「ミズキちゃんは君の事を知ってしまったからね。せつかく同じ学校に通うクラスメイトなんだし、カナコちゃんの相談役になつてもらおうと考えている」

「な……」

カナコはその提案に啞然とした。

「カヤも心配してるんだよ。君が学校に馴染めないんじゃないかって」

うんうん、と頷うなずくカヤ。ちなみにまだ笑っている。

「どうかな?」

「必要ありません」

ヤヒロの問いにカナコは即答した。

「私、元々高校には行かないつもりでしたし、もう行きませんから」

「どうして?」

「タタリガミが二日連続で顕あらわれたんですよ? もう二週間のスパンなんて当てにならない以上、学校に行く余裕はないはずですよ」

「だからといって、二十四時間三百六十五日、君を基地で待機させる訳にはいかないよ」
本来、タタリガミの発生件数は二週間に一度あるかないかだ。それ以前に、いつ顕れるかも判らない敵を相手に、ひたすら待機するのも不毛だろう。いくら〈スサノオ〉を動かせる人間がカナコひとりしかないとしてもだ。

「タタリガミを殲滅するのが俺達の仕事だ。だが、だからと言ってカナコちゃんの私生活プライベートを犠牲にしていい理由にはならない。君には君の人生があるんだからね」

「……………」

ヤヒロの言葉にカナコは押し黙ってしまふ。

反論の余地がない。何より彼が本心から自分を心配してくれていると判ってしまっから。彼だけではない。カヤやメイ、他にも多くの（タカマガハラ）のスタッフがカナコを気遣ってくれているのを知っている。

それでも……。

「……………っ！」

カナコは踵きびすを返すと、ブリーフィング・ルームから逃げ出すように駆け出した。

「神宮寺さん……」

ミズキはカナコが出ていき、閉まったドアを見つめた。

「あたし、追いかけてもいいでしょうか？」

カナコが飛び出していく前、ほんの一瞬見せた辛そうな表情がミズキの目に焼き付いている。

「及川さん——カナコの事、頼める？」

「はい！」

カヤの頼みにミズキは全力で応える事にした。

† † †

「ヤヒロ君がどうして及川さんをカナコの相談役に選んだのか、判った気がするわ」

カナコとミズキがいなくなったブリーフィング・ルームで、カヤは呟くように言った。

「ほう？ どうしてかな？」

「とぼけるんならいいわ。私も上手く言葉に出来る気もしないし」

「ま——俺も直感的に思っただけなだけだね。あの子達の出逢いが運命的だった」

ヤヒロは、やはりどこか飄々とした口調で言った。

「運命、ね。私の大嫌いな言葉だわ」

「それは失敬」

† † †

ブリーフィング・ルームを飛び出し、カナコは走る。

あの場にいることが耐えられなかった。

相談役？

——違っ。

きっとカヤもヤヒロも、自分の事を見限ったのだ。だから、あの少女に自分のお守りを押し付けたのだ。

親が育児放棄するように。

子供が飽きたおもちゃを手放すように。

そんな風に考えてしまう自分が嫌だった。

だがどうしようもない。そういう風にしか思えないのだ。

期待を裏切られるのが怖いから。

信じたものに見放されるのが怖いから。

だから何にも期待しないし、信じない。

まず最初に最悪の可能性を想定する。

それがカナコという少女の処世術だった。

しかし、それは十六歳の子供がする決意ではない。

本当は誰かにすがりたい。判ってほしい。追いかけてもらいたい。

そう——誰かに。

「——待って！」

声が聞こえると共に、カナコの手首が後ろからつかまれた。

振り返る。

そこにいたのはミズキとかいう少女だった。全力で走ってきたのだろう。息を切らせて、

しかしカナコの手首を離さないように強く握っている。

「やっと追いついた……。神宮寺さん、走るの、速いね」

そう言うのにこやかに自分を見つめる少女の瞳に、一瞬、カナコは言葉を失った。彼女は人の感情の機微きびに敏感だ。目を見ればおおよそ、相手がどういった感情を自分に向けているか判る。大概の人間は表面では友好的な態度を取りながら、内心ではカナコに対して無関心だ。

〈スサノオ〉の搭乗者——それ以上でも以下でもない。

以前のカナコは、自分は世界に必要な人間だと思っていた。

だから〈スサノオ〉の搭乗者となった時は嬉しかった。

何か出来る事があるかもしれない。何かが変わるかもしれない。

しかし現実とは違った。何も変わらなかった。

ただ〈スサノオ〉を動かす部品になっただけでよかった。

日常を繰り返し、鬱屈とした気持ちを抱えて生きている。

〈スサノオ〉の搭乗者となって、カナコはそれをはつきりと認識した——してしまった。

それからは独りでいる時間が、より多くなった。元々、社交的な性格ではない。人の中で孤立するより、独りきりで孤独を感じている方がました。

それが一番楽で傷付かない。

他人と関わるのは煩わしいし、嫌な事ばかりだから。

だが——

「？ 神宮寺さん？」

カナコを見つめるミズキの目は、無関心でも、哀れんでいる類のものでもなかった。

強いて言うなら好奇心だろうか。それも下卑たものではなく、純粋な興味から生じる無垢なものに感じられる。

「……………なに？」

だからカナコはミズキに答えてしまった。

普段なら振り払って無視しているところだが、それが出来なかった。

この少女が自分に対して何を言うのか、それが気になったのかもしれない。

「あ——えっと……」

言い淀むミズキに対して、カナコは無言で言葉を待つ。

「あ、あのね——」

「……………」

「お、お腹空かない……？」

カナコは無言でミズキの手を振り払った。

第二話『名前を呼んで』

時刻は午後七時。

〈タカマガハラ〉施設内にある食堂は、食事をするスタッフ達で賑わいを見せていた。

メニューは割りとバラエティに富んでおり、大手のレストラン並だ。ミズキは迷った結果、ハンバーグのセットを注文した。

対して、彼女の向かいの席に座っているカナコはホットコーヒーのみだ。それに備え付けの角砂糖を五個以上入れ、更にミルクを追加してかき混ぜている。

「……神宮寺さん、甘くない？」

どこかぼけつとしているミズキだが、さすがに気になって訊いてみた。

「甘いわ——だから何？」

カナコは無表情に答えて、コーヒーを啜^{すす}った。

「ううん、別に。甘いのが好きなの？」

「ええ」

「でも、飯時だよ？ それだけでいいの？」

「ええ」

ミズキの問いかけに対して、カナコの返答はそつけない。元より会話を弾ませる気などないのだろう。

だが、それでもミズキはめげない。カナコは聞えれば答えてくれるのだ。無視されるよりはずっと良い。

もつともカナコにしてみれば、無視して付きまとわれるより、さつさと質問に答えて解放されたいだけだ。だから仕方なく、こうして食堂でミズキと相席している。

その光景は〈タカマガハラ〉のスタッフ達の目には、ある意味で異様に映った。

〈スサノオ〉の搭乗者であるカナコの顔を知らない者など、この施設にはいない。そして彼女は常に独りで、誰も近くに寄せ付けない事を知っている。

だから、『あのカナコが見知らぬ少女と食事をしているらしい』——そんな情報が広まるのはあつという間だった。

「うわ、マジでカナコちゃんが女の子という」「誰、あの子。友達かしら？」「うちの〈戦姫〉は今日も見目麗しいねえ」「いや、見知らぬ少女の方もなかなか……」「ねえ、百合？ 百

合なの?!」「うるさいぞ。気付かれるだろう!」

自分達の席を遠巻きに見つめる一団——としか呼びようがない——に気付いていない振りをしてながら、ミズキは「もう気付いてるけどね」とカナコに囁く。

「……気にしなくていいわ」

いつもの事だとカナコは嘆息する。

「ねえねえ、〈戦姫〉って神宮寺さんの事でしょ? うわあ、かっこいいなあ」

「あなた、私の事、馬鹿にしてるでしょう?」

「違うよ! それにロボットに乗ってるなら二三名はあつてしかるべきだよ!」

ステータスだよ、とミズキは付け加えた。

「もしかして、あの人達って神宮寺さんのファンクラブとかじゃないの?」

「……知らないわよ。馬鹿馬鹿しい」

カナコはそう言ってまたコーヒーを啜った。無表情に。

それが照れ隠しに見えたのは都合が良すぎるだろうか、とミズキは思索した。

カナコは無愛想だが、それはただ不器用なだけのようにも思える。きつと感情表現が苦手なだけだと。

改めてカナコの容姿に目を向ける——美人だ。

透徹した人形のような無表情も美しいが、笑えばまた違った魅力があるに違いない。

「……………なに? 急に黙って」

無言で自分を見つめるミズキに、カナコは不可解そうな表情を浮かべた。

「ううん。神宮寺さん、笑えばもっと可愛いものになって」

思ったままを言葉にすると、カナコはほんの一瞬だけ啞然とし、

「……何を言ってるの? 口説き文句のつもり?」

と、怪訝な顔をした。

「あ——ち、違うよ!?! そういうんじゃないなくて、あの……」

ミズキはしどろもどろになって言葉を探す。

思った事をすぐ口にしてしまうのは自分の悪いところだ。

「あはは。何言ってるんだろうね、あたし」

「……………」

カナコはただ無言。

ミズキも乾いた笑いを浮かべるだけで、言葉が出ない。

その間にミズキが注文した料理が席に届く。

「うわあ——美味しそう」

思わず口にしてから、ミズキがハンバーグに手を付ける。ナイフとフォークで切り分けると、肉汁が溢れ、視覚的にも食欲が刺激される。

しばし、ミズキは食事に専念した。

会話が途切れ、場が沈黙する。

「——あなた、何なの？ どうして私に構うの？」

沈黙を破ったのは意外にもカナコだった。ミズキが料理を平らげるタイミングを待って、くれているのだろう。それに気付くとミズキは無性に、温かい気持ちになった。

しかしカナコは無感情な瞳を向け、無感情な声音でミズキに問うてくる。

初めて出逢った時と同じ、どこか寂しげな瞳で……。

† † †

カナコにはミズキの意図が判らなかった。今日初めて出逢った彼女が、何故、自分をこ
うも構ってくるのか。

カヤ達に頼まれたから？

それとも、他に何か目的があるのだろうか？

判らない。ミズキの考えている事が判らない。

判らないという不安は、怖いという感情に繋がる。

他人が自分をどう思っているのか判らないのが——怖い。

無関心ならいい。下心があったり、嫌われているのも構わない。もう慣れた。

だが、ミズキのカナコに対する態度や表情は、そういった類のものではない。

ならば彼女は自分に対して、何を思っている？

それが判らなくて怖い。

だから問うた。

「——あなた、何なの？ どうして私に構うの？」

自分でも驚くほど底冷えのする声が出た。

それは恐怖の裏返し——怖れを悟られまいと虚勢を張っているだけだ。

「……………」

問われたミズキは無言——いや、何を言われたのか理解出来なかったのかもしれない。

それほどにカナコの問いは、異国の言語の様な、呪文めいた響きを伴っていた。

それは叫びだった。

（みっともないな、私——）

内心で眩き、カナコはうつむく。

（何を期待していたんだろう）

膝ひざの上で力なく握った手を見つめる。

（何を言っただけだったんだろう）

判らない。

（私は……）

自分で自分の気持ちが判らない。

（……………死にたい——）

意識が思考の闇に沈んでいく。

だが——

「——神宮寺さん！」

突然の声に、沈みかけていたカナコの意識が浮上した。

正面に視線を戻す。そこには、今にも泣き出しそうなミズキの姿があった。

「あ、あたし——あたしは……」

あたふたと慌てふためきながら、ミズキは言葉を探している。

「あたしは及川ミズキ、十五歳、七月七日生まれの蟹座かに、血液型はO型、好きな食べ物は肉料理全般、スポーツは苦手、趣味は……カ——カツコイイ、ロボット！」

「……………」

一息でまくし立てるミズキに、今度はカナコが無言を返した。

そして気付いた。今のは、先ほどのカナコの問いに対する答えだ。

「あたしはね、神宮寺さんの事を知りたい！ 友達になりたいから！」

「……………」

「だから、その、迷惑かな……？」

不安げにこちらを見上げるミズキに、カナコは戸惑った。

友達。

久しく縁がなかった言葉だ。

だからだろうか、ミズキの言葉に現実感がなかった。テレビ画面の向こう側のような、

舞台上の芝居のような、遠い世界の出来事のような感覚。

「……神宮寺さん？」

ミズキの窺うような声が、カナコを現実^{うかが}に引き戻す。

問うたのは自分だ。ミズキはそれに答えた。

だがカナコはどう返せばいいか判らなかつた。

だから――

「……趣味はロボットって、何それ？」

そんな言葉しか出てこない。

しかしミズキは気を悪くした様子も見せず、

「へ、変だよ。男の子みたいってよく言われるんだ」

そう言つて「あはは」と苦笑するだけだ。

ちくりと胸が痛んだ気がした。

違う。こんな事が言いたいのではない。

嬉しかったのだ、ミズキの言葉が。

だが素直にそう表現する事が出来ない。その方法を忘れてしまった。

それに怖かつた、自分をさらけ出すことが。

なのに、ミズキはそれをやってのけた。

苦笑して見せているが、恥ずかしかつたに違いない。まだ顔が上気している。

だからだろうか、カナコも少しだけ本音を言いたくなつた。

「変じゃないわ……私も、好きなもの」

呟くように言葉にする。

「――でもそれは、あなたの『好き』とは多分、違う」

そうだ――『好き』などというロマンチックな感情ではない。

「私には〈スサノオ〉しかない。だから〈スサノオ〉に乗るの。〈スサノオ〉に乗ってい

る時だけが安息なの。〈スサノオ〉だけが希望なの。〈スサノオ〉だけが救いなの。〈ス

サノオ〉に乗っている時だけ、私は私でいられるの」

これは『依存』だ。自分は〈スサノオ〉に生かされている。

「〈スサノオ〉が……〈スサノオ〉だけが――」

^{うわごと} 謔言のように繰り返す。

〈スサノオ〉――と。

そして気付いた。今、自分はどんな顔をしているのだろう。

(気持ち悪いな、私――)

ミズキの顔が見られなかつた。彼女はどんな顔で自分を見ているだろうか。

自己嫌悪で死にたくなかった。

受け入れてもらえなかったらどうする？

いや、もう充分に引かれているだろう。

拒絶されてしまったらどうする？

そしたらきつと……。

(私はもう、生きていけない)

それきり思考が停止する。もう何も考えたくない。

だから、ミズキが何か言う前に立ち去ろうとした。それがお互いのためだと。

「待って！」

なのに、ミズキはカナコを引き止めた。

先ほどまで泣きそうなくらいに慌てていたのに、今、カナコを見つめるミズキの目は真

剣だった。

ミズキの大きな黒い瞳に自分が映っている。それが確認出来るほどの至近距離で、カナ

コはミズキと見つめ合う。

言葉が出てこない。思考も働かない。

「……えつと」

引き止めたミズキも同じらしい。だからカナコも少しだけ冷静になれた。

少なくともミズキは嫌悪感を表情に出してはいない。引いた様子もない。

それだけで、また少し安堵した。

「あ、あのね——神宮寺さんの『好き』が、あたしなんかとは比べられない事は判ったよ。

それってすごい事だよね！」

と、ミズキが興奮気味に言った。

「神宮寺さんと〈スサノオ〉は一心同体で、そこには深い絆とか、熱い信頼関係があるっ

て事ですよ！」

「……そんな上等なものじゃないわ。これは私の……ただの依存症よ」

「ううん。だとしても、きつと素敵な片想いだよ」

『片想い』——ずいぶん詩的な解釈だ。

ミズキと話していると、おかしな気分になってくる。彼女は自分を偽らず、飾らず、本

音でぶつかってくる。

それが嬉しかった。だから、カナコも少しだけ自分の事をさらけだしたくなった。

〈スサノオ〉に乗って戦う理由を。

それはタタリガミを倒すためではない。

ましてや世界平和のためなどでは決してない。

カナコには、そんな正義感や使命感などない。正直なところ、この世界がどうなるかと、カナコの知った事ではない。

彼女が〈スサノオ〉に乗ってタタリガミと戦う理由——それは『戦いたいから』だ。

それだけが自分の存在価値だから。

それだけが自分の存在理由だから。

だから戦う。

自分のために。ただ、それだけのために。

「幻滅したでしょう？ 私は世界を護るヒーローなんかじゃない。ただ自分勝手に戦うだけなの」

「それでもいいんじゃないかな。『世界のため』とか、『誰かのため』とか、そういうお題目は立派で綺麗だけど、そういうのって現実だと、なんか胡散臭い気がするし」

「……………」

「自分のために戦える神宮寺さんはすごいよ。あたしはそう思う」

ミズキの言葉は自信に満ちている。

だが、その根拠はどこにある？

「私の事、何も知らないくせに」

カナコが警戒するように身構える。

しかしミズキは、

「うん、まだ何も知らない。だから教えて、神宮寺さんの事！」

「……………つまらない女の、つまらない話よ」

「つまらないかどうかは、あたしが判断するよ」

「……………」

カナコは観念したように席に座り直した。

それからはミズキの質問攻めだった。たいしたことは訊かれなかった。カナコにしてみれば他愛もない、どうでもいいような事ばかり。

しかし、ミズキは楽しそうに自分の話を聞いてくれる。それが嬉しかった。

ミズキとの会話を楽しいと感じた。

まだ自分にそんな感情が残っていたのが不思議に思えた。

同時にこうも思った——ミズキも楽しいと感じてくれるだろうか？

楽しいと感じているのは自分だけなのではないか？

途端に寒気がした。

——もしそうだったら？

ネガティブな感情がカナコの思考を侵食していく。
いつもこうだ。悪い方向にばかり気持ちが傾く。

傷付きたくないから。

傷付くのが怖いから。

心に予防線を張って、周囲に壁を作って生きてきた。

だが、もうそんなのは嫌だ。

だから——

† † †

カナコの様子が変わったと、ミズキは直感的に察した。

「神宮寺さん？」

急に黙り込んでしまったカナコに声を掛けると、彼女は小さく肩を震わせた。

何かを恐れるように。

何かに怯える^{おび}ように。

その『何か』の正体をミズキは知っている。

だから——

「……………ねえ、及川さん——」

「ミズキだよ」

カナコの言葉を制して、ミズキは言った。

「あたしの名前——ミズキ。及川さんじゃなくて、ミズキって呼んで」

「……………」

ミズキの発言にカナコは再び黙り込む。だがそれは先ほどまでの気まずい沈黙ではなく、どこか気恥かしさを感じる間だった。

「……………ミズキ」

ためらいながらミズキの名前を呼ぶカナコ表情は、どこにでも居る十六歳の少女のそれだった。彼女の不安——それは自分との距離感だろう。どこまで踏み込んでいいのか判らない。目には見えない心の距離。

それを縮める方法をミズキは知っている。

お互いを名前で呼ぶ事。

最初はそれだけでいいと思う。

まず踏み込んでみて、それからお互いに安心出来る距離を知っていればいい。

最初の一步を——傷付く事を恐れていたら、多分、何も始められないし、始まらない傷付けてもいい。

傷付けられてもいい。

きつとそこから、すべてが始まるから。

「うん！ なに？」

ミズキは笑顔でうなずく。

カナコが踏み込んでくれたのが、ただ嬉しくて。

† † †

カナコは気恥かしさでいっぱいだった。

ただミズキの名前を呼ぶだけで、気力を使い果たしてしまった気がする。

この雰囲気です虐的な発言など、無粋ぶすいなだけだろう。
だから、

「……何でもないわ」

と、自分のネガティブな思考と共に、くだらない言葉を切り捨てた。

「えー、何でも訊いてくれていいんだよ？」

ミズキが不満げに言う。だが気を悪くした様子はない。

それに安心する。この空気を壊さずに済んだ。

（——ミズキ）

胸中で呟く。不思議な響きだ。

名前そのものに意味があるのか、その名を冠する少女の存在によるものなのか。どちらにせよ、カナコにはその名が心地良く思えた。

自分の名前はどうかだろう？

カナコ。

自分の存在を表す名前。

（私の名前——）

——呼んで欲しい。

（私も。ミズキに）

——名前を呼んで。

（そしたら、きつと）

きつと――

「――神宮寺さん」

ミズキの声に、はっとして視線を移す。

「……なに？」

努めて平静を装う。

しかしそれも徒労に終わる。

「あのね……あたしも神宮寺さんの事、名前で呼んでいい？」

心を読まれた気がした。

恥ずかしさで死にたくなかった。

思考回路が働かない。

だから――

「……………好きに呼べばいいわ――」

それだけ言うのが精一杯だった。

空になったコーヒーカップに一度視線を落として、窺う様にミズキに戻す。

彼女の表情は喜色に染まっていた。

笑みを浮かべてカナコを見ている。

そして、その唇が言葉を紡ぐ。

「うん！ ありがとう――カナコ！」

ミズキの言葉がゆつくりとカナコの心に浸透していく。

胸がいつぱいになる。

思考回路はとつくに焼き切れていた。

顔が熱くなつていくのが止められない。

名前を呼ばれただけなのに。

ただ、それだけの事なのに……。

あとがき

どうも、流遠亜沙です。

『あなたといるから ver.1.75 第一章』をお届け致します。

この作品は元々、とある新人賞用に書いたものです。本来は二〇一二年中に完成させるつもりだったのですが、結局、翌年（二〇一三年）の年明けに完成しました。結果は一次選考も通りませんでした……。

その後、一週間ほど旧サイトで期間限定配信を行った後、二〇一三年のサンシャインクリエーションで同人誌として販売した経緯を持ちます。

そして、現在は二〇一四年。時間も経ったし、そろそろ普通に公開してもいいかなと思いついて、この度、三回に分けて新サイトでの掲載となりました。

細かい手直しをしましたが、内容は本質的には変わっていません。

ただ、自分のサイトで公開するにあたって、メンタル・フィジカル・インテリジェンス・システムの『精神カ物理転換装置』を『形相干渉システム』に変えました。元ネタは検索すると出てきます（笑）。

他にも、自分なりにロボットアニメや怪獣特撮へのリスペクトを盛り込んだつもりなので、そちら方面が好きな方はニヤニヤしてください。

カナコとミズキの百合描写も楽しんでいただければ幸いです。

作品解説みたいなものは次回以降に少しやろうかと思えます。何か質問などあれば、答えられる範囲でお答えしますので、感想と一緒に送ってください。

ちなみに、第三話『名前を呼んで』はタイトルを含め、かなり『魔法少女リリカルなのは』の影響を受けています。言葉のチョイスや言い回しなんかもそうですね。

僕の文章はかなり、榊一郎・都築真紀、両氏の影響を受けています。

好きな作家さんを見つけて、その人を目指すのは、ひとつの指針になります。単なる劣化コピーになる危険性もありますが……。

人の心をえぐるリリカル叙情的な文章、目指します。

それでは、良きところで謝辞を。

ここまで読んでくださり、ありがとうございます。

相変わらず鬱屈とした物語ですが、何か感じていただければ嬉しいです。

次は第二章でお会いしましょう。

2014/04/14
流遠亜沙

『あなたというから』ページに戻る

トップページに戻る